理・空論であるかもしれないが、四名の親王が浮かんだ。征西将軍懐良親王・良成親王、元弘の乱で土佐に配流され、のち九州に渡ったといわれる尊良親王、大宰帥の世良親王、この御四方である。

戒名ながら歳浮の私は、この四親王の行跡を知らないが、佐伯荘に奉じた「宮」は、この四親王の御子であってもよい。

そして、宮方の衰退まで、高崎城では百回に及ぶ攻略がくり返されたといわれるが、佐伯氏の動いた気配はない。筑後川決戦以後の佐伯氏の行動は、全く謎につつまれているが、この宮の橋頭堡は、確かな勢力を感じさせるものがあると私なりに考えている。

しかし、時勢には抗しきれず、佐伯地方に一波乱あったと見たい。そして、この宮の最期が潜龍塔の高貴の人であり、南北合一なった続、すぐにも祀られたのではなかろうか。

だいたい、諸系図書を見ても、戦乱期の都合の悪い所はまっ殺されている。佐伯氏の不備な点も、案外そんなところではないかと推察している。

ところで、市福所の五輪群墓は、宮方の勢力として、菊池氏や佐伯氏の武将も葬られているかもしれない。そして、この時期の菊池一族の敗者と、畑野浦の菊池残党とは結びつかないだろうか。これも私見の推理だが、これ以外に残党の畑野浦に入る動機や時代は、考えられないでいる。そうなると、海からであろうか。また市福所付近から畑野浦への経路、山越えはどんなものであろうか。

こんなことは、地図を見てもわかるものではない。土地の人との茶飲話に、古老からうけるへんてつもない話りの中に、かすかなヒントを得られることがある。

ここまで一気に書いて、戦線しながらも懸案の数点が、やはり「宮」を基点にして、何かつながっているように思えてならない。不明な点がはっきりしたことだけでも収穫であると、私なりに満足している。

そして、研究書のない、九州入りした南朝親王系統の研究、こんなことで私の頭は一杯である。

（おわり）

便りの中から　その一

スペイン・ポルトガルに親善使節を——

東京　麻生英臣氏より

——同封の写真は、昨年十月スペインポルトガルを訪れた際、四百年前大友宗麟公のローマ法王宛の親書を託された、伊東マンショ一行が訪ずれ、大変な歓迎を受けた、当時のスペインの首都であった、トレド市の玄関口のものです。

ちょうど画家ゴヤなどがここに住んでいて、一行は会っているはずです。一九八二年が、長崎を出発して丁ようど四百年記念となり、今私が大分県当局に話して、大分県知事を団長とする、親善ミッションを出してはいかがかと、提案しているところです。

相手のスペイン・ポルトガルの関係者は、是非やって来て欲しいと云っております。

昨年私がヨーロッパ出発前に知りあった方ですが、横浜に在住の七十二歳の大友義介（よしすけ）という、大友宗麟直系の方がおられます。つい先日津久見の宗麟公の新しい顔の除幕式で参列され、県知事や上田保氏とは、以前から知友の関係にあります。そこで佐伯史談会のことを伝え、会誌を一部差し上げました。なにしろ直系ですから、大友氏一族に関するご記憶は、たいしたものです。——　（下略）

（注）少年使節の渡欧に、宗麟は関知していないが定説、しかし提案賛成（羽）